
始まりの魔法使いと運命

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりの魔法使いと運命

【NNコード】

N8042N

【作者名】

ハル

【あらすじ】

男は死んだ。それに理由なんてないし事情もない、よくある有り触れた事件のような死に方だ

そんな彼は生前のつまらなさを憂い神の玩具になることを承諾する
行先はFate、チカラはラスボスクラス
——では、せいぜい神を楽しませるとじよつ

プロローグ（前書き）

今夜2作目の新作投稿のハルさんでございます

Fateファンに怒られないといよいよですね……びくびく

プロローグ

さて、いきなりだが俺というちっぽけな一個人の話に僅かでも良いから耳を傾けてほしい。なに、時間は取らせないさ

俺は平々凡々を体現したかのような至極普通な何処にでも居る一般人だと自負している。事実、周りからの評価も大差ない

強いて挙げればサブカルチャー、所謂、マンガやアニメといったものは人並み以上に詳しいと言つた特徴も無くはないかな

なにが言いたいか、と? そうだな、最後に現状の確認といかせて貰うとしよう。そら、時間は掛からなかつただろう?

俺が今現在存在しているであろう場所は、前後左右斜め上下に至るまでが全て白でホワイト一色と呼べる。ちなみに地平線の彼方が見えるほどに見事に物が視認できない

そんな中、俺は生前と同じ姿形にて今思考に耽つてゐる……あ

あ。今の言葉でわかつてもらえただろうか

俺は死んだ

死因？ 一家心中だよ、父が借金を作ったのが発端という三流小説にでも見受けられそうな理由でな。全く以て馬鹿らしい

まあ特に今生に未練はなかつたから構わないがな。目立たず地味に成り過ぎず、多くも広くも少なくも狭くもない交友関係だった

故、俺を表面上は悲しむ奴らは居よう。しかし日が経てば忘却の彼方へと追いやられる、俺といつのはそれだけの価値しかないのさ

「ふーん、中々に愉快な思考回路してやがんな」

……驚いたな

ああ生前にも片手で数えられる程にしか驚愕した経験はない、だからこそ驚いた

少なくとも俺が生きていた頃には見ることがないからな——人が空中から此方を見下してくるなど。いや貴重な体験をした、活か

す機会は永久に無いだろうが

「まあ良いや。おいお前マンガとか好きなんだろ
俺は神様でチカラとかやるからもう一度人生やり直せ
ちなみに確定事項だから返答は聞いてねえ
ついでにお前は俺が殺した、ミスとかじやねえからそこの履き
違えんなよ」

了解した、チカラとは何をくれるのだろうか

「おうおう話がスムーズで良いな、それでこそ人間だ
今までの奴らは喚くばつかで五月蠅かつたから余計にな」

生憎とこいついた性格なんだ、感情が無い訳ではないが平均より
も希薄でな。それで

「わあつてるよ、行き先はFateつー世界だ
あそこで俺様の暇潰しのために暴れてこい、お前は従順だから能力
くらいは決めさせてやんよ」

有り難い。では暫し待つていただけるだろうか、考える時間を頂
きたい

「時間の流れなんぞあつてないようなモンだ、気にしなくても問題ねえよ

ちなみに決めないなら強制的にDiabolosの聖遺物だかんな」

把握した、でなじうこったチカラにするとしようか……

「この様な状況は生前にも一次創作と呼ばれるジャンルの小説にて
経験済みだ

ならばチートと呼ばれるような能力を要求するのが吉なのだろう、
彼方も「暇潰しのために」と言っていたのだからな

となると個人で無双の武を發揮するよりは組織だった世界征服系
が望みだらうか、ふむ……

では——のチカラを戴きたい

「ほら、良こんじやねえの。しかしあはは変わつてゐるよお前

褒め言葉と受け取らせてもらひつよ。あつこでほんの少の魔改造を
お願いしたい

「俺に指図すんな、まあ面白がつだから不間にしてもやるナビよ。ほ
らよ」

感謝する、これで貴方を満足させられれば良いが

「今までの奴より期待は出来そうだな、んじゃ行つてきやがれ」

足元に穴か、王道だな

そして俺は得たチカラと共に元いた世界から見て異世界へと降り立つ、ただ彼を楽しませるためだけに――

プロローグ（後書き）

感想・指摘・批判・評価・お気に入り・レビューお待ちしております
す

始まりの魔法使い（前書き）

今日は……………今回も、短めです
では

始まりの魔法使い

まず俺に意識が戻ったとき、そこに在るのは「無」だけだった。

神よ……まさか創世記か？ ここは、確かに俺の授かつたチカラならば良いのかも知れないが

仕方がない、とりあえず世界を造る所から始めよう。使用用途は魔法世界の再現ぐらいにしか思つていなかつたのだがな

まずは「鍵」を想像する、巨大で強大なチカラの形。それが「鍵」だ

その名を「コード・オブ・ザ・ライフメイカー
造物主の鍵」という

とある魔法使いの少年が教師をするマンガにて、ラスボスであつた造物主のチカラだ

作中では特に戦闘力は明かされなかつたが、描写から推察するにラカンよりは強くナギと同等には強いのだろう。それとおそらくが全ての魔法を使えると見て問題はないはずだ

……Fat e世界から見たらかなりハチャメチャだがな。魔法の域である飛行を難なく行つたり、一時的に雷の上位精靈と化す等々

まあとつあえず創るつ、俺は魔力量も造物主並になつていらし
いからな。実質無限に等しいと思うのは間違つていないだろつよ

な。銀河系の誕生だ

……つん、思考の片手間に創造してみたが意外と可能なんだ
……そういえば、ベースとなる惑星がある訳でもないのだが。
何故に創れたのだろうか

未元物質のようなモノでもあつたのか、はたまたチリやガスを媒介として創造したのか……創れたのだから良いか

まあこちらの世界は放置しよう、原作Fat eと同じになるように。その代わりに火星ベースに魔法世界を作り、俺はそちらに住もう。たまにこちらにも顔を出さなければだが

ふむ、やはり魔法世界は明確なイメージがある分つくり
やすいな。次は魔法世界の生命の創造を行おう

原作で生命を生み出すシーンがなかつたので生命は創れないのではないか、と思つたが創れるのだな

とりあえず人の祖先、そして獣人なども放り込んで……これで後は人類に進化するのを待つのみだな

魔法世界に墓守人の宮殿を創り浮遊させて、と……寝るとしじう。チカラの連續使用で些か疲れた

次目覚めたときにはどつなつてているのやら

……余談だが Fate ってアニメ見たくらいなんだよな、問題ないと良いが

…………ん

ふう、なかなかに休めたな。さて今世界はどうなっているのだろう
なってきたが、まあ、大丈夫だろう

遠見の魔法にて覗いてみると、本格的に神のよくな感じに
さてまずは魔法世界を…………ふう。疲れが残っているのだ
るづか？ はたまた新手のスタンド使いか

既に原作と同等に進化・繁栄しているだと…………？ いや、おか
しくはないのか？

原作の造物主の言葉から察するに魔法世界の歴史は2600年ほど
しかない。もしくは最低2600年かもしれないが

つまりは2600年あれば同等になるのは至極当然なのだろうか
…………とか俺は2600年も眠り続けたのか、規格外な

そして街中に俺に似た像があつたのだが、ちなみに俺は造物主の格好をしている

造物主は神として知れ渡つたのか…………？ いや別段、魔法世界を消すなどといった目論見は皆無なので存在が知られた所で一向に構いはしないのだが

……その内に姿を晒しておこう。『完全なる世界』を設立し、原作メンバーをトップにでも据えようか。うん、良いな

次は現実世界、たゞがにじむらは原作通りの筈だ。Fat e世界ならば、だが

ふむふむ。ああなるほど理解した、今はギルガメッシュの統治する時代なのだな。見たところ未だ子ギル状態のようだが

子ギルはホロウ限定だったが、見たことはなかつたのだよな……
…一次にて存在することは知っていたが

まあとりあえず接触を図るとじよつ、関係を持つことは決意したことだ。あわよくば友好な関係を築きたいしな

彼は同等以上の存在ならば朋友にする可能性がある。現に彼の唯一の友エンキドウは神がギルガメッシュを妥当するために遣わした存在らしく、ギルガメッシュと同等のスペックを誇るらしいからな

まあネギまの魔法と造物主のスペックならば引けはとらないだろう……おそらく。絶対にと言えないのが怖いところだ

アーチャーを早急に造るべきだな、特に3番田と6番田を。何故かと問われれば趣味だがなっ！

まあ別に原作を見る限りではアーチャー以外の人形シリーズも存在するようなんだよな、炎と水の2人が

正直アーチャーにも同属性の使い手がいたから影が薄い、何のために居たのか軽く謎だな

おつと考へ事に没頭しそぎだな、反省反省。とりあえず多分にたぶんを含むがアーチャーを創つてみよう……

あれから数日が経過した。そして結論から言おう、アーウェルンクスは創れた、果てしなく疲労困憊だが

カラダ自体はそこまでの難易度ではなかつたのだが……やはり性格の再現、およびスペックの調整が大変だった

原作でも何故か調整はデュナミスが行つていたようだしな……早々にあちらを見つけて出るべきだったか？

まあ過ぎたことは過去へと流すが得策だろ？。とりあえず転移にて表世界の……バビロニアだったか？ そこへ行かねばな

舞台は変わり、旧世界、バビロニア。その都市にその少年はいた
黄金に輝く髪、血のように真っ赤な瞳を持ち、溢れ出るカリスマ
を抑えよつともしない、王氣溢れる、この世のモノとは思えぬ美し
さを携えた少年

その名を、ギルガメッシュといひ……

「ふふつ、今日も僕の街は平和です。まあ僕が統治している
のだから当然ですけどね」

ギルガメッシュ――長いのでギルとしよう――は世界
を統べる王だ。この様な少年でありながらそれを成すのには並々な
らぬ苦労が……

「ないですねえ

ほら僕つて文武両道、天下無敵、才色兼備 を地で行くような完璧
超人ですし？

この世界は最初から僕のモノになるのを義務付けられてるんですよ

……なかつた。彼は事実、その言葉の通りに、まるで最初から
決まつていたよつて世界を手中に収めた

それこそ最初から存在した線をなぞつていいくかの如く

ギルガメッシュは暴君である、しかし子ギルは未だ良き王であった。多少、自分絶対主義の片鱗は垣間見えていたが

「ふふふ……ん、珍しいですね。侵入者ですか」

侵入者の気配の感知など、彼の持つチカラに掛かれば容易な事なのだろう

それは侵入者が気配を隠しもせず、むしろ呼び寄せるかのように元気配を出しているからなのだが

ほんの少しだけその事を考え、止める。

「僕は王です。王たる者が侵入者程度に狼狽えて如何します?」

そして彼は侵入者の居るであろう方向へと歩を進める

「正々堂々と正面から尋常に捻り潰して差し上げましょうか」

片や造物主側

「…………氣配とせ、どのように泄すのだ？」

「しつかりしてくれないか、マスター」

「我が主、お氣になせりや」

世界最古の英雄王（後書き）

感想・指摘・批判・評価・お気に入り・レビューお待ちしております
す

邂逅する者たち（前書き）

おそれらく今年最後の投稿になりますかね

といつか3話しか投稿していないのに総合評価が400を超えた……

！？

邂逅する者たち

あの後、転移魔法にてバビロニアへの侵入をあつさりと果たした

ギルガメッシュならば罠や防壁の一つでもあるだろうと危惧していたが……杞憂だつたか？

それか異文化の魔法には反応を示さない、という可能性もあるがな。ふむ……

「いや、迎撃や防御系のモノはないけど侵入を知らせるよつものがあるよ」

「そつか……といつことはヤツが出向いてくるのだろうな

「我が主、『安心を。私とテルティウムが居る限り主には視線すらも寄越させません』

つむ、頼もしい。いくら俺が造物主のチカラを持つていようと所詮は素人だからな

それに比べてアーヴェルンクスは魔獣討伐や悪人捕縛などをして経験値は積ませたから俺よりは強いな

俺も付いて行つたが出番はなかつたさ、はつはつは

もはや魔法世界にて軽く話題になつてゐるらしいしな

……ああ念のため言つておくが テルティウム 3番目と セクストウム 6番目だぞ？

別に他のでも良いが、この2人が好きなだけだ

セクストウムは好み、テルティウムは言わずもがなだろう。
むしろこの2人を嫌いと言うのはネギま好きとしてどうなのだろうか

「まあセクストウムは嫌いな人もいるかもしけんな……」

「我が主、お呼びでしょつか？」

「む、いや気にせずとも良い。たんなる独り言だ」

危ないな、無駄に聴力を良くしたのは早計だつたか？
いや身体能力を高めるならば避けては通れないか……

「マスター、セクストウム。そもそもじやれあいは終わってもうえ
るかな……来る」

ガキン、という硬質な音と共に俺の眼前に武器が飛来した。とい
うか飛来していた

造物主スペックなのに反応できない俺といつ奴は……やはりす
ぐに強くならねばな

そして俺へと向かつてきた武器の類はすべて障壁を貫くとまでい
かずに地へと落ちる

セクストウムとテルティウムも同様だ、ふむ。真名解放を行わな
ければ基本的には防ぎきれるか……

あとはギルガメッシュの場合、エアの一撃を警戒しなければなら
ないが……とかアレはさすがに無理だろうな

そもそもが神の創りし世界を切り裂くような代物だ
俺程度の障壁など障子紙と同じ容量で裂けるだらうな

「へえ、僕の攻撃を防ぐなんて中々やりますね」

その言葉が耳に届くと同時に、その空間を満たす王氣オーラ

俺でも充てられてしまったのだ、普通の人間が彼にかしづいてしまうのは仕方がないことだらう。

さすがカリスマA+、その効果は魔力・呪いの類とは良くなつたものだな

「いきなり訪ねてしまつた無礼は詫びよう、すまなかつた」

俺がギルガメッシュに對して頭を垂れると従者2人も続いて膝をつく。

セクストウムは嫌々ながらだが……まあ大丈夫だらう

「はあ、今更そんなことを言われましてもねえ

……我が領地へ無断で踏み込んだ罪は拭えませんよ?」

「重ね重ね申し訳ない、ならば如何すれば許していただけるだらうか?」

「そうですねえ……」

考える素振りをするギルガメッシュ、しかしすぐにその動作を止

めてこひらを見据えてきた

「…………死んで償つてもらいましょうか

その言葉よりも早く、こひらと迫るのは幾十もの武器。
それらが俺の身体を貫いて――――――

「…………くえ、これも避けるなんて。幸運は再びあなたに味方したようで良かつたですね」

いなかつた。傍らに控えたテルティウムが石の息吹にて武器を石化・破壊

そしてセクストウムが俺を抱えて瞬動による回避をしていたからだ
「我が主に対する明確な敵対意志…………交渉の余地はありません。
我が主、排除の許可を」

抱えていた俺を優しく下ろし、敵を睨みつけたまま怒氣の籠もつた声で問つてくるセクストウム

「僕もいい加減イライラしてきてね…………
マスターに一度ならず一度までも攻撃を加えたんだ、覚悟は出来てるだろうぜ」

そんな2人とギルガメッシュの間に立ちふさがり、普段の無表情ながらもギルガメッシュを睨み付けるテルティウム

「ハア……出来れば穩便に済ませたかつたのだがな。良い、許す。存分にやれセクストゥム、テルティウム」

諦めと共に告げられた俺の言葉に対して、こちらからは確認することは出来ないが

「…………了解！」

2人が微笑んでいたことを――――――当たり前だが俺は知らなかつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042z/>

始まりの魔法使いと運命

2011年12月31日17時52分発行